まど

変わる魅力

銀色に光る切れ端、溶接の練習に使われて赤茶色の焼き跡が残る筒。ステンレス機器の製造過程で生まれた廃材は「宝の山」だ。

札幌市東区の造形作家、秋谷祐子さん(64)はステンレスを素材にした作品を手掛けてきた。今夏、美術団体「新制作協会」(東京)の会員有志が札幌で初開催した作品展に、中東・ドバイの街並みをモチーフにしたオブジェを出品した。

会社勤めの傍ら、20代の頃から創作活動に打ち込んできた。父が営むステンレス機器の製造会社に幼いころから出入りし、「ステンレスは私にとって身近な素材」とほほえむ。「冷ややかで鋭い印象の板がローラーで曲げられ、柔らかな曲線を描く様子が神秘的」と魅了された理由を語る。

今やステンレス工場の廃材は作品に欠かせない。ステンレスをバーナーで焼いて色を付けてみたり、噴火する火山のオブジェではワイヤを何度も巻きつけて噴き上がる炎を表現した。「アイデアは作れば作るほど生まれてくる」という。

ステンレスの一番の魅力は「どんな形にでも変わるところ」と秋谷さん。「私自身も常に進化し続けたい」と新たな創作に挑む。

(田口谷優子)